

公表

事業所における自己評価総括表

○事業所名	びーすの児童デイあぼろ		
○保護者評価実施期間	令和7年1月20日		～ 令和7年2月21日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	21名	(回答者数) 12名
○従業者評価実施期間	令和7年1月30日		～ 令和7年2月21日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	13名	(回答者数) 11名
○事業者向け自己評価表作成日	R7年10月11日		

○分析結果

	事業所の強み(※)だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	児童の特性やスキルに合わせたカード支援を行っている	<ul style="list-style-type: none"> 児童の特性やスキルに合わせ、一人ひとりのスケジュールを活動時に毎回用意している。 発語の有無に関わらずコミュニケーションカードを活用している。言葉、ジェスチャー、カードなど様々なコミュニケーション手段で、本児の要求や拒否、伝えようとする力を伸ばす支援を行っています。個別のコミュニケーションツール(P.E.C.S使用)など、児童・保護者の要望にもできるだけ応じるようにしています。 	<ul style="list-style-type: none"> 本児のコミュニケーション手段を大切に、言葉でコミュニケーションができる児童に対しては、言葉でコミュニケーションが伸びるよう支援します。不明瞭である場合は、カードも使い、「確実に思いが伝わった」の経験と自信に繋げていきます。 事業所でうまくいったコミュニケーションツールは必要であれば、家族に提供します。 サービス担当者会議に積極的に参加し、学校や他事業所との連携を行います。
2	活動内容は自由時間以外に、個々の特性や好みに合わせた個別の活動を行っています。	<ul style="list-style-type: none"> 自由時間を過ごすことが得意ではない児童も多いため、個々の特性、好み、スキルを考慮した活動を取り入れています。 「1人でできること」「少し手伝ってもらおうとできること」を個々の課題として用意。家の中で1人で集中できることを見つけてごし方の幅を広げる支援を行っています。 「タオルたたみ」や「タオル干し」など家事練習や調理の 	<ul style="list-style-type: none"> どの活動も児童の参加意欲が出るよう、個々の好みや得意なことを中心に取り組んでいます。 高学年～高校生の児童は、取り組む内容を自分で選択できるようにしています。自己選択した活動に最後まで取り組むことで「達成感」に繋がっています。 作業工程がわかりにくいものは、手順書を用意し、「見てわかる」の支援も行っています。
3	様々な場面で「自分で決める」場面を取り入れ、自己選択の練習を行っています。	<ul style="list-style-type: none"> おやつ時間は、十個以上の選択肢の中から「今日は何を食べるのか」を選択できるようにしています。選択肢は毎年児童の好みによって変更し、幅を広げるよう工夫を行っています。 児童によっては、「おやつを食べる」「買い物に行く」の選択肢の中から活動を自分で決める経験もします。 毎回行う「お手伝い」の活動も「自分の希望」を選択しています。希望が被った時は譲り合う経験ができるよう支援を 	<ul style="list-style-type: none"> 一人一人の好みや、意欲が高まる内容を必ず選択肢の中に用意するよう工夫をしています。 選択肢は内容が自分でわかるよう視覚支援を活用した一覧表を用意しています。自分の顔写真を貼り「やりたい」「これがいい」の意思表示を支援しています。 選択肢が違った時には、「悲しい」「悔しい」の気持ちに寄り添い、様々な感情を経験できるように支援しています。

	事業所の弱み(※)だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	クールダウンする部屋の確保が難しい。	<ul style="list-style-type: none"> 建物上の問題で部屋数が限られている。 パーティションなどで仕切りを行い、個別の空間は確保しているが、不安定な児童が複数出た時は、別々にクールダウンする場所の確保が難しい。 クールダウン用のテントを用意しているが、テントを使用した場合、部屋の空間が狭くなる。 	<ul style="list-style-type: none"> 家具の位置など、改善の余地があるのか工夫を行う。 不安定な児童がいる場合は、落ち着いている児童と外出するなど、お互いがリラックスできる環境の調整を行う。
2	保護者とコミュニケーションを取る機会が少ない。	<ul style="list-style-type: none"> 平日利用の児童は、送迎車で帰宅するため、添乗員が「今日の様子」を説明している。連絡シートは担当のスタッフが様子を記入しているが、直接顔を合わせて話すことができないため、情報が伝わりにくい。 面談は法人の所有する事務所の相談室で行うため、利用開始前の見学以降、保護者が事業所の中に入る機会があまりない。そのため、『事業中の様子』『どんなスタッフがいるか』『どのように子どもたちが活動に参加しているか』などの質問に対し「わからない」のアンケート回答に繋がっていると考えられる。 	<ul style="list-style-type: none"> 保護者の希望を確認し、参観や見学ができる期間も設ける。 支援者のことを知りたいという母の要望に答える手段を検討する。 直接話ができる機会が少ないため、子どもの成長と一緒に喜べないことが残念だと感じる。法人主催のセミナーなど保護者とスタッフが関係づくり、意見交換が行えるような企画を検討する。
3			